

# 堆肥混合でコスト減



JA職員④と秋肥散布について話す野村さん  
(茨城県境町で)



家畜ふんを原料とする堆肥は安価だが、肥料成分が不安定で、散布や運搬に手間がかかる課題がある。堆肥を主体に化学肥料を混ぜた「混合堆肥複合肥料」は、一定の成分が保証され、粒やペレット状で扱いやすい。化学肥料より安価で、施肥コストを下げられる。堆肥による土づくり効果も見込める。

混合堆肥複合肥料は堆肥の原料割合が50%以下、肥料成分は窒素・リン酸・カリの合計で10%以上といった規格がある。朝日アグリア(東京都豊島区)の混

合堆肥複合肥料「エコレット」シリーズは豚ふん堆肥が主体。同成分を保証する同社の化学肥料より2割ほど安いという。同社は2021年に2度値上げし

**混合堆肥複合肥料のポイント**

- 家畜ふん堆肥と化学肥料を混合
- 安価な堆肥で肥料成分を補う
- 堆肥散布の手間を削減
- 化学肥料と同じように利用可
- 土づくり効果に期待
- 土壌の保水性、肥料持ちを改善

例: キャベツで窒素8%、リン酸10%、カリ8%保証の混合堆肥複合肥料を利用した場合、化学肥料と比べコストを1、2割削減

## 成分保証、土づくり効果も

だが、混合堆肥複合肥料の上げ幅は化学肥料より少なかった。茨城県境町でレタス、キャベツなど約3・5畝を経営する野村浩之さん(60)は、同社の混合堆肥複合肥料を19年から葉物野菜で使う。窒素8%、リン酸10%、カリ8%が保証された肥料を施用。ほぼ同じ成分を保証する化学肥料と比べ1、2割ほど肥料コストを抑える。野村さんは「化学肥料と同じ使い方ができて、収量にも影響がない」と話す。

以前は化学肥料と、有機質主体の濃縮ペレット堆肥を散布していたが、混合堆肥複合肥料に一本化し、散布の労力も軽減できた。堆肥を主体とする同肥料は肥効がゆっくり出ることも特徴。野村さんは「長雨で急激に肥料成分が流出せず、生育が安定する」と話す。

農水省の調査によると、混合堆肥複合肥料の20年の生産量は8854トン。16年の4879トンから4年間で8割以上増えた。JA全農とちぎは、県などから連携して県内産の牛ふん堆肥を使った混合堆肥複合肥料「まどかちゃん」を開発し、19年から販売を始めた。21年は約100トンを供給し、22年もこれを上回る見込みという。担当者は「園芸中心に取り扱いを希望するJAが増えている」と説明する。

堆肥と化学肥料を混ぜた安価な肥料には、20年の肥料取締法改正で創設された「指定混合肥料」もある。堆肥と化学肥料の割合に決まりはない。肥料成分は保証ではなく、上下に幅を持たせた目安で表示。肥料成分がばらつきがちな牛ふん堆肥を主体に製造できる。

朝日アグリアは水稲向けの「稲サポ」、園芸向けの「農家想い」といった指定混合肥料を販売する。土づくり効果が高く、同程度の肥料成分を含んだ化学肥料と比べて価格は1、2割程度安いという。(おわり)

(鶴澤朋未、金子祥也、川崎勇、野村梨沙子、丸山紀子が担当しました)